

變遷餘考にいへり。按ずるに、貞享二年梅染の事に付、紺屋棟取龜甲屋與助の言上書に、大納言利家卿御代より染物被仰付館紺屋新五与申者、身代おとろへ、大樋町末に罷在、新五方に敷通之御書所持仕。と記載す。是彼の別家新助が家なるべし。享保十九年の金澤細見圖譜に、今云ふ紺屋坂に居たる紺屋の子孫、今塩屋町の御館紺屋なりといへりとあり。子孫零落して諸方へ轉宅せしと聞ゆ。

○紺屋坂門

舊藩中は、紺屋坂門とて坂下に門あり。元祿十四年六月廿六日の覺書に、紺屋坂腰掛臨御門より蓮池の方へ通りぬけ申事不仕管。御用に而相通り候面々者、押被遣置候。然處御用無之面々茂通り拔往来仕者有之由。御用無之者猥に通拔不仕様に、何茂出仕之時分、諸頭中茂此の御横目中より可申談旨、月番登岐殿被仰聞。とあり。又年譜に、元祿十二年八月廿七日紺屋坂御門際に於て、定番馬廻組小塚伴七与組外山本次太夫之養子三郎兵衛与喧嘩、伴七母方いとこ石黒平八不計此所來り、助太刀致し、三郎兵衛を斬り殺す。伴七は夜に入り死すといふこと見えたり。右の

門は、百間堀往来通門にて、舊藩中は此の門にて往来人を改めたりしかど、明治二年十一月取除けられたり。

○紺屋坂番所

舊藩中は、紺屋坂門の傍にありて、往来人を改めける。微妙公夜話録に云ふ。金澤城外かうや坂の番人を急に小松へ召されけり。番人の足輕甚驚き參上する處、利常卿御露地へ召出され、老年まで懈怠なく勤番致し、神妙に思召すなり、罷歸り、せん茶給べいと命ありて、金子五兩下されけり。

其の者落涙致し有難がりしに、外番人の者共も夫よりきほひけるとなり。有澤永貞の古兵談殘叢集には、小松より金澤の足輕番人を召させられ、神妙に思召旨にて、金子十兩被下之と載せたり。按ずるに、右は利常卿思召ありての事なるべし。三州志に、微妙公の爲人を按ずるに、聰懸頓敏、其の知懸鏡の如く、一以て百を綜し、貴賤上下の情に通じ、治亂得失の理に達し給ふといへり。

○蓮池

此の地は、今百間堀往来の脇、公園の入口なる一町の地邊をいへり。舊藩中は、此の地を音讀みにてレンチと呼べり。

富田景周の蓮池考に云ふ。蓮池の地名は、古來よりの名に非ず。蓮池堀の邊りなる地ゆゑに、後人蓮池と音にて唱へ、蓮池堀と其の名を分つよしなり。蓮池の名は、極樂橋などと同じく、そのいにしへ本源寺尾山城内にありし頃よりの遺名なりといへり。平次按ずるに、關屋政春の古兵談に、尾山城は、其初め小立野の尾崎を掘斷ち、是に築く。其の掘切は、今奥村伊豫屋敷と城との間の蓮池なり。蓮池より堂形の方へ押回る角に、古の清水あり。金銀の雲母浮む。是を金澤といふ。其の頃は、蓮池は潤堀也と云へり。右等の傳説共にて見れば、いにしへ本源寺の時なる蓮池は、金洗澤の續きにて、彼の清水を取りて蓮池となしたるならば、即ち今云ふ蓮池の地、是往古の蓮池なるべし。蓮池堀は、此の邊りなる壕塹なるにより、蓮池堀とは後に呼びたるならんか。富田氏の蓮池考の説は請けがたし。舊傳に云ふ昔城内本丸の地に、一向道場を建立し、本源寺と號し、或は金澤御堂と呼べり。又郷民尊崇して御山と稱す。山の麓に蓮池を造り、或は花園を開きたり。其の遺稱後世までも残りて、蓮池の地を即ち蓮池と稱し。花園の遺蹟をば御

花島とは呼べりと。按ずるに、蓮池を造りて蓮花を採り、佛刹に供養する事は、佛家のならはしなり。菅家文章卷四に、菅公讃岐守に任せられ赴任し給うて、讃州にての詩の小序に、予初莅境、巡視州府。府之少北有二蓮池云々。採摘池中百千萬葉。分捨部内二十八寺。聞者隨喜。見者發心。加之、香油東西供養。と載せ給へり。又舊本今昔物語に、加賀國の寡婦の宅中に蓮池あり。花の時に遇ふ毎に、蓮花を郡中の諸寺に分供し、彌陀佛を供養せしよし見り。慶保胤の日本往生極樂記に、加賀國有二婦女。其夫富人也。良人亡後者志在柏舟。數年寡居。宅中有小池。池中有蓮花。常願曰此花盛開之時。我正往生西方。便以此花爲贊。供養彌陀佛。每遇花時。以家池花分供郡中寺云々。とあり。今加賀國石川郡蝶屋庄内に蓮池村といふあり。彼の寡婦が居宅中なる蓮池は、若しくは此の地ならんか。故に邑名と成りたるにや。慶保胤は、賀茂忠行の二男にて、寛和二年入道し、往生傳を作ると見わたれば、彼の寡婦も其の以前の人なるべし。同往生傳に、近江國坂田郡女人。姓息長氏。毎年採筑摩紅蓮華供養彌陀佛。といふ事も見えたり。さて